
夢色冒険譚～ココロのファンタジー～

NACONO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢色冒険譚（ココロのファンタジー）

【Nコード】

N2381Y

【作者名】

NACONO

【あらすじ】

外界から閉ざされた花の精霊の国、百華国。ここに暮らす少女長月栞奈は、外の世界を見てみたいと日々思っていた。ある日彼女は、国に流れついた兄弟ロヴィーノとフェリシアーノを助ける。彼等と出会ったことで栞奈は、ある目的で旅をしたいという兄弟とその仲間たちの冒険に巻き込まれていくのだった。

始まりはすぐそこに

美しい花々が溢れ、海に囲まれた街フローラ。ここに高名な絵描きの老人が住んでいました。

彼には双子の孫がおり、兄は強くて勇気がありました。弟は泣き虫で怖がりだけど優しい少年でした。双子なのにあまり似ていません。

兄はロヴィーノ、弟はフェリシアーノという名前です。

フェリシアーノは幼い時から祖父の真似をして絵を描き始め、めきめきと腕を上げていきました。そんな彼に老人は熱心に絵を教え、フェリシアーノもそんな老人が大好きでした。

ある時、老人は言いました。

「この街には綺麗な物が沢山ある。だから俺も今まで街の姿を描き続けてきた。どれもいい出来だった。……でも、俺はまだ満足なんかしてねえぞ」

「どうして？」

お爺ちゃんの絵を誉める人は沢山いるじゃない、とフェリシアーノは反論します。

「俺はな、もっと色々な場所を見たい。この街の外の景色を描きたいんだ。確かにヨーゼフの奴から話は聞くが、実際に行ってみてえな……」

ヨーゼフというのは、いつも老人の絵を買ってくれのおじさんのこと。色々な国を回って物を売っているそうです。勿論フェリシアーノの祖父の絵も色々な街で売っています。

「ねえ、それに僕もついて行っていい？」

「ああ勿論さ。こんな可愛い孫を置いていけないだろう？」

老人はそう言って、孫の頭を撫でました。撫でられたフェリシアーノもすぐ嬉しそうです。

老人はその後も絵を描くのに忙しく、旅の実現は難しそうでした。それでもフェリシアーノは、いつか祖父と旅ができる日を楽しみにしていました。

しかし、その日が来ることはありませんでした。

「惜しい人を亡くしたものだ……」

真っ赤な夕日が光る丘で、ヨーゼフはそう呟きました。彼の視線の先には、『ヴァルガス』と刻まれた墓標がありました。

フェリシアーノとロヴィーノの祖父で、高名な画家でもあったアントニウス・ヴァルガスは今朝、息を引き取りました。先程葬儀が終わったばかりです。アントニウスはいつも絵を描く時に腰かけていた椅子で亡くなっており、彼の前には完成した絵があったそうです。きっと死ぬ前に仕事を終えて満足したのだらうと、周りの人々は言っていました。彼は安らかな笑顔で眠っていたそうです。

そして兄弟は、ヨーゼフの家に引き取られることになりました。母は兄弟を産んですぐに亡くなっていましたし、父は金遣いの荒さが原因で随分前にヴァルガス家を勘当されていました。頼れるような親戚もおらず、そんな二人を哀れんだヨーゼフが、兄弟を自分の家に迎えることにしたのでした。

「お爺ちゃん……！」

フェリシアーノはただ泣き続けていました。大好きだった祖父とはもう会うことも話すことも、一緒に絵を描くこともできないのです。そして、一緒に世界を回って旅をするという約束も、永遠に叶うことはなくなっただけでした。

どうして悲しいことは続けて起こるのだろう、墓の前で立ち尽くしていたロヴィーノは、そんなことを考えていました。彼にもまた、果たされなかった約束があったのです。

ロヴィーノは、いつも一人でした。

口が悪く反抗的な彼は、周りから悪い子と思われていたのです。本当は負けず嫌いで自分の気持ちを言葉にするのが苦手なだけなのですが。

祖父のことも本当は弟と同じくらい大好きで尊敬しているのですが、やはり素直になれません。さらに弟の方が自分よりも可愛がられていると感じていたので、一層反抗的になってしまっていました。

元々絵が上手で素直なフェリシアーノに対して劣等感を抱いていたのも、原因の一つだったかもしれせん。

そんな彼にも一人だけ、心を許せる存在がいました。

葬儀の一週間ほど前、港の近くを歩いていたロヴィーノは、一人の少年に出会いました。彼はロヴィーノよりいくらか年上のように、綺麗な緑色の瞳と明るい茶色の髪をしていました。

話を聞くと、少年は海の向こうの国から来たようです。今日は家族と一緒にフローラに観光に来たのだとか。

「なあなあ、君なんて言うん？よかったらこの街案内してくれへん？」

「急に何だよコノヤロー」

その後少年があまりにもしつこく頼んでくるので、ロヴィーノは渋々彼の案内を引き受けたのです。

何かを見たり聞いたりするたびに、少年は目を輝かせ、声を上げました。そしてロヴィーノにもたくさん話を聞いてきました。

ロヴィーノは最初、そんな彼に不快感を抱きましたが、少年があまりにも楽しそうにするので、少しずつですがロヴィーノも楽しくなってきました。

ようやくロヴィーノが少年と過ごすのが楽しくなってきた時には、もう日が暮れていました。少年はもう、両親の待つ宿へ帰らなければならなくなりました。フローラに彼がいるのは今日一日だけで、明日の朝にはもう、船に乗って家に帰るそうです。

「今日は楽しかったで！」

そう笑って、立ち去ろうとする少年を、気づけばロヴィーノは呼び止めていました。

「もう、帰っちゃうのかよ……あれだけ俺のこと振り回しといて、勝手に帰るなんて許さねえんだからな……」

行かないで。もっと俺といてよ。楽しい時間だったんだから。本当はこんなことが言いたいの、冷たい言葉しか吐けない自分が嫌になっちゃいます。少年は戸惑った顔をしていましたが、またすぐに明るい笑顔を浮かべて言いました。

「来年も来る。そしたら真っ先にロヴィーノ訪ねてく。約束や」

「本当だな？嘘ついたら許さねえぞチクショー！！」

「本当や。だから安心してな」

少年はそう言って、ロヴィーノの前から立ち去って行きました。太陽のように明るい笑顔が印象的だった彼にまた会いたいと、ロヴィーノは強く願いました。こんな可愛げのない自分に、あんなに優しく接してくれる人は初めてだったのです。

そして、次に会えた時は、もう少し素直になろうとも思っていました。

しかし、その約束が果たされることはありませんでした。

その夜、フローラ発の観光船、少年とその家族が乗るといつていた

船が大波に飲まれたという報せが届きました。
ロヴィーノはさらに次の日に、その報せを受け取り、一人で泣き続けました。

外から閉ざされた、たくさんの種類の花が咲き誇る国。ここに、一人の少女が住んでいました。

否、彼女は本当は『少女』ではありません。でもここでは、少女としておきましょう。

また、彼女は人間でもありません。スズランの花の精です。そして、見た目はまだまだ若いですが、こう見えてかなりの時を生きています。

この国に住むのは皆、彼女のような花の精たちです。その花にちなんだ魔法を使うことができ、それぞれ一つ、何かの仕事を持っています。その仕事を生業として一生を終える、それが精たちの生き方でした。

だから、外に出て過ごすなどという選択肢は、あるはずがないのです。

しかし少女は、外に出てみたいと思っていました。家族のようにいつも一緒に友達もたくさんいて、一年中穏やかな気候のため物質的に豊かな生活も送れていたけれど、何か物足りないのです。

外にはどんな国があるのか、この目で見てみたい。それが少女の願いでした。

叶わない願いだとわかっていても。

果たされなかった約束に苦しむ兄弟と、叶わない願いを抱く少女。
この三人が出会った時、壮大な物語が幕を開けるのですが、この時
は誰がそれを想像できたでしょう。

出会いと別れ、人と人の絆……あらゆる人々を巻き込んだ三人の物
語の始まりは、すぐそこに迫っています。

もともと、物語が始まるのは、もう少し先のお話ですが。

陽だまりの日々

葬儀から一晩明けて、フェリシアーノとロヴィーノは見知らぬ屋敷の中にいました。ここがヨーゼフの家である大貿易会社『エーデルシュタイン商会』です。

「君達の兄弟になる子を紹介しよう。大丈夫、二人のことはちゃんと話してあるよ」

ヨーゼフはそう言って、兄弟を案内しました。お屋敷の中にはたくさん綺麗な花が活けてあり、赤いじゅうたんが敷かれています。窓も部屋の扉も、落ち着いた色調でシンプルではあるけれど、とても綺麗なものでした。

フェリシアーノとロヴィーノは、それらに目を奪われてしまいました。

そして二人はある部屋に迎え入れられました。赤いじゅうたんが敷かれた部屋の中にはぎっしりと本の詰まった大きな本棚とグラランドピアノ、人が二、三人は寝られそうな大きいベッド、そして勉強机とテーブルが一つずつあります。やはりどれも落ち着いた色遣いでシンプルなものです。

「ローデリヒ、いらっしやい。それからエリザベータも」

ヨーゼフの言葉に反応して、誰かがこちらに駆けてきます。黒髪の少年と栗色の髪を後ろでまとめた少女でした。二人は兄弟よりも年上らしく、フェリシアーノとロヴィーノを見て首をかしげます。

「父上、このお二人が？」

少年が尋ねました。どうやら彼は、ヨーゼフの息子のようです。

「ああ。ロヴィーノ、そしてフェリシアーノ・ヴァルガス君だよ。

あのヴァルガス画伯のお孫さんさ」

「ええ！？あのアントニウス・ヴァルガスの？」

ヨーゼフの言葉に、少女が興奮します。

「そうさ。二人も挨拶しなさい」

ヨゼフに促され、少年と少女は兄弟に向き直りました。

「初めまして。ローデリヒ・エーデルシュタインと申します。お会いできて光栄です」

「俺はエリザベータ・ヘーデルヴァーリだ。よろしくな」

「エリザベータ、こういう時は『私』と言うのが正しいですよ？」少女、エリザベータを少年、ローデリヒが注意します。

「今日からこの二人も、エーデルシュタイン家の一員だ。仲良くするんだぞ」

「はい！！」

ヨゼフの言葉に、ローデリヒとエリザベータは、元気よく笑って答えました。

その日から、四人の兄弟のような生活が始まりました。

ローデリヒは頭が良くて音楽や美術が得意だったので、色々なことを兄弟に教えてくれました。

フェリシアーノは大喜びですがロヴィーノはそういった話についていけずにふて腐れることもありました。その時はエリザベータが彼と一緒に家の中や外で遊んでくれます。ヘーデルヴァーリ家は代々エーデルシュタイン家の護衛を務めているらしく、エリザベータもなかなか力があります。そんな彼女と遊んでいるのですから、ロヴィーノも日に日に力をつけ、強くなっていきました。

一方のフェリシアーノも、ローデリヒから知識を教えてもらうだけでなく一緒に絵を描いたりピアノを弾かせてもらったりもしたので、ますます芸術の才能が開いていきました。

兄弟がエーデルシュタイン家に引き取られて十日ほど経ち、ヴァルガス兄弟はある兄弟に出会いました。彼等は『バイルシュミット酒造』という大きな造酒会社の息子で、酒を買ってくれるエーデルシュタイン商会にはよく出入りしているそうです。

兄はギルベルト・バイルシュミットといって、とにかく自由奔放な少年です。銀色の髪と、熟した果実のような赤い瞳をしています。弟はルートヴィツヒ・バイルシュミットといって、真面目で自分にも他人にも厳しい少年です。金色の髪と、澄んだ水色の瞳をしています。

ヴァルガス兄弟とバイルシュミット兄弟は、何回もあっているうちに自然と仲良くなりました。フェリシアーノは二人をギル、ルートと呼んで慕い、ロヴィーノも少しずつですが二人と打ち解けていきました。

それにローデリヒとエリザベータも加わり、ギルベルトとルートヴィツヒが来た日は五人で一緒に遊びました。喧嘩をすることもかなりありましたが、五人で遊んでいる時間は、とても楽しいものでした。

そんな日々を繰り返しているうちに、十年以上の月日が流れていきました。

そして五人も大人になりました。

ローデリヒはエーデルシュタイン商会の後継ぎとして、芸術の才能と教養はそのままに、威厳と落ち着きのある青年になりました。

エリザベータは強さはそのままに、おしとやかな女性となりました。ギルベルトは剣術の腕が上がりましたが、自由奔放なところはそのままでした。

ルートヴィツヒは真面目な性格はそのままに、武術を身につけた逞しい青年になりました。

ロヴィーノは体術が強くなりましたが、素直になれない性格はそのままでした。

フェリシアーノは力は弱いけれど、優しさと芸術の才能を持った青

年になりました。

そして、物語の始まりの時も、迫っていました。
。

***キャラクター整理 その1* (前書き)**

まずはここまででてきた、メイン五人とその周辺の人たちの紹介。

キャラクター整理 その1

オリキャラいます

年齢かなりオリジナルです

本家様の設定を引っ張ってきている部分もあります

フェリシアーノ・ヴァルガス(19)

高名な画家の祖父を持つロヴィーノの双子の弟。エーデルシュタイン家から援助を得ており、現在美大の一年生。絵や音楽の才能に長けている。楽観的で細かいことを気にしない性格だがちょっと(?)泣き虫で怖がり。祖父が亡くなってから、ヨーゼフの屋敷で暮らす。「一緒に世界の色々な国に行く」という幼い頃の祖父との約束をいまだ忘れられずにいる。

ロヴィーノ・ヴァルガス(19)

フェリシアーノの双子の兄。祖父や弟とは違い芸術分野は苦手です。フェリシアーノに劣等感を抱いている。弟と同じくエーデルシュタイン家の援助で現在は航海学校の一年生。性格は負けず嫌いで口が悪く、意地っ張りだが実は寂しがり屋。幼い頃に一日だけ過ごした少年を忘れられず、その思い出に縛られている。フェリシアーノとは何かと言い争いするが、本当は大事な弟だと思っている。

ローデリヒ・エーデルシュタイン(25)

エーデルシュタイン商会の現当主。幼い頃のヴァルガス兄弟の保護者代わりでもあった。学業や芸術面で非常に優れており、落ち着きのある性格でプライドは結構高い。振る舞いはいたって上品。昔は弱くエリザベータに助けられてばかりだったが、現在はかなり改善された模様。恋愛等には慣れていないのか、エリザベータの気持ち

に気づきつつも上手く応えられずにいる。

エリザベータ・ヘーデルヴァーリ(23)

代々エーデルシュタイン家の護衛を務める家系に生まれた、ローデリヒの護衛兼助手で会社の経営にも手を貸す。今はおしとやかな性格になったが、幼い頃の活発な性格や優れた身体能力は健在。時々男っぽい行動や言動が出る。ヴァルガス兄弟やルートヴィヒを弟のように可愛がっている。ギルベルトは幼なじみで喧嘩友達。ローデリヒに主従関係以上のほのかな想いを抱く。

ギルベルト・バイルシュミット(23)

エーデルシュタイン商会の取引先、『バイルシュミット酒造』の息子。自由奔放な性格で跡取りの自覚が薄い。現在は跡取り見習いとして実家の仕事を手伝っているが、暇があればローデリヒたちの所に顔を出す。剣術が得意で、エリザベータは昔からよき好敵手。勉強は嫌いだが高頭が悪いのではなく、戦略を考えさせるとその才能を發揮する。弟が少し怖い。

ルートヴィツヒ・バイルシュミット(21)

通称ルートノルツツ。ギルベルトの弟。兄とは対照的に真面目で曲がったことが大嫌いな性格。自分にも他人にも厳しい。跡取りとなる兄を色々な面で手伝いたいと、現在大学で勉強中。趣味は読書。兄と違い得意なのは銃術だが、鍛えられた肉体を持つため体術もかなりのもの。ローデリヒや兄には振り回され、ヴァルガス兄弟には手を焼く苦勞人。

ヨーゼフ・エーデルシュタイン(50)

ローデリヒの父でエーデルシュタイン商会の前当主。アントニウスの絵を高く評価していて、よく彼の絵を買い付けに来ていた。彼の死後はその孫であったロヴィーノとフェリシアーノを引き取って育

てる。最近当主の座を息子に譲り、現在隠居中。

アントニウス・ヴァルガス【ローマ帝国】

故人。ロヴィーノとフェリシアーノの祖父で、高名な画家だった。色々な国をこの目で見たいという望みをかなえられないまま亡くなった。

***キャラクター整理 その1* (後書き)**

次からついに物語が始まる、はずです。

流れ着いた兄弟（前書き）

いよいよ本題に入ります。いきなり長くなりました。

流れ着いた兄弟

二メートルはあるスズランの花。その根本に一人の少女が座って何かをしている。

少女は白地に緑の木の葉模様が入った浴衣を着て、腰のあたりまでの黒髪と濁りなき黒い瞳をしていた。

「菜奈、そろそろお昼ですよ。休憩にしましょう」

すると黒い短髪に眼鏡をかけ、淡い緑のチャイナ服を着た長身の青年が、少女に声をかけた。

「あ、^{ルシン}緑星さん」

菜奈と呼ばれた少女は、何かを作っていた手を止め、立ち上がった。

「皆集まっていますから、さあ」

「そうですね。でもこれを完成させてしまいたいです。あとスズランに水をやらないと」

緑星は、では待っていますよ、と菜奈に言い残して立ち去る。そして彼女は『これ』を仕上げてどこかへ駆けていく。

その場所で、大きな出会いが待っているとも知らずに。

菜奈は水辺に来ると、持ってきた小さな水瓶を浸す。瓶が水で満たされ、立ち去ろうとした時、彼女は何かを見つけた。

「見馴れないものですね……：外の世界のものでしょうか？」

菜奈が手に取ったのは、黒くて細長いもの。中は空洞で、脚か手を入れられそうだ。これが『外の世界』でいう長靴というものだが、彼女はそれを知らない。

だが、再び視線を上げた彼女はとんでもないものを見つけた。

「あれは！」

茶色の短髪をした青年が一人、下半身を水に浸して岩にもたれかか

っていたのだ。

「しつかりしてください！」

栞奈はすぐさま青年に駆け寄り声をかけたが、彼は苦しそうな声を出しただけだった。

「息はあるようですね……白光の術！」

栞奈の手から白い光が放たれ、青年はようやく目を開けて言葉を発した。

「ここ、は……？」

「お気付きになられたのですね」

安堵の笑みを浮かべる栞奈だが、青年の表情は晴れない。

「に、兄ちゃん、は……？兄ちゃんはどこ？」

「もう一人いるのですか！？」

その言葉を聞いた栞奈は青年を陸に連れて行き、彼の兄を探すべく再び水辺へ走っていった。

少し深い所まで入り、転覆し壊れた小舟に覆いかぶさる人を発見した。彼が青年の兄だろう。髪の色が少し濃い所を除けば、青年にそっくりだった。

「意識がないですね……」

急いで陸に彼を運んだが、目を覚まさない。

「少し強めにやりますか……白光の術・改！！」

栞奈は力をこめ、白い光を兄に降り注がせる。少しすると、彼は急に咳込んで水を吐き出した。その後彼女は先程までいた花園の方へ走り、大声を出した。

「梅花！^{メイファ}緑星さん！」

少し経つと、栞奈は緑星、そして梅花と呼んだ少女と共に戻ってきた。その少女は黒い長髪に赤い花の髪飾りをつけており、長い巻き毛が伸びている。丈が短めの赤いチャイナ服の下にはいた白いロングスカートが揺れた。

「これが『外』の人？随分ぼろぼろネ……特にこつちが」

梅花の視線の先には、水を吐いたものの意識を取り戻さない兄がいた。弟の方も意識こそあるがかなり苦しそうだ。

「誰……？」

「大丈夫。悪いようにはしませんから。梅花、緑星さん、後はお願います。私では応急措置しか出来ません」

心配そうな弟に、栞奈が笑いかける。

「いきますよ、慈悲の光！」

「これ飲むといいヨ」

すると緑星は兄に何か魔法をかけ、梅花は弟に赤い小瓶を手渡した。すると、

「……はっ!？」

「何か元気が湧いてきた！」

兄は急に起き上がり、弟の顔には生気が戻っていく。

「お前、誰だ？」

目を覚ました兄は困惑した表情を浮かべた。

「私は長月栞奈と申します。貴方がたは？」

「俺はロヴィーノ・ヴァルガスだ。こつちは弟の……」

「フェリシアーノ・ヴァルガスっていうんだ！よろしくね」

すっかり元気になった弟、フェリシアーノが笑いかけてくる。

「ロヴィーノさんにフェリシアーノさんですね。覚えました」

「ところで、栞奈だっけ？ここはどこ？」

「見たことない場所だぞコノヤロー」

「ここはですね……」

栞奈がフェリシアーノとロヴィーノの問いに答えようとした時だった。

「ここは百華国、外からは閉ざされた花の精霊の国ある」

どこからか声が響き、誰かがこちらへ近づいてくる。

「老師！」^{センセ}

「ミスター……」

「耀様？」^{ヤオ}

梅花と緑星、そして栞奈が振り返った先には、赤いチャイナ服を身に着け、長い黒髪を一つに纏めた男が立っていた。

「客人とは久しいあるな。我は王耀^{ワンヤオ}、この国の王にして精霊の長ある」

さらに後ろからもう一人、和服を着て黒い短髪と黒い瞳をした青年が歩いてくる。

「そして、私は本田菊。副長を務めております」

菊はそう言って、兄弟に礼をした。

流れ着いた兄弟（後書き）

ここでオリ人名の解説。

メイファ

梅花^{メイファ} 台湾

ルシン

緑星^{ルシン} 二 マカオ

ご察しの通り、この章ではアジアメンツが登場します。

花咲き誇る国（前書き）

他のアジアメンツもここで登場。オリ人名がいっぱいあります。

花咲き誇る国

「まあ、治るまでゆっくりしていくよろし。栞奈、それから緑星と梅花、二人を頼むあるよ」

「いいのですか？もしかすると外からの密偵かもしれないのに！」
菊は焦ったように王耀に忠告するが、

「落ち着くある菊。心配しなくてもこいつらからそんな匂いはしない、長年の勘あるよ」

王耀は特に慌てる様子もなく答えた。そして菊を促し、二人でその場を立ち去って行く。

しかし去り際に菊が見せたどこか冷たい表情が、兄弟の心に引っ掛かった。

それから栞奈は、ロヴィーノとフェリシアーノに百華国のことをたくさん話した。

「耀様のおっしゃった通り、この国に住むのは皆花の精霊です。そして皆、一生何かの仕事をすることを決められています」

「じゃあお前も精霊なのか!？」

「もう仕事してるの?」

ロヴィーノもフェリシアーノも身を乗り出して聞く。

「私はスズランの精です。そして仕事ですが、こんな物を作っています」

栞奈が手に乗せて二人に見せたのは、白く小さな球状のものだった。内部が淡い橙色に光っている。兄弟はそれが何か分からず黙り込んでいたが、

「これはスズランの灯りヨ。普段の生活だけじゃなく、お祭りの飾りとか色々役に立ってるネ」

梅花が解説してくれる。

「ふーん。ということはお前らも精霊か？」

ロヴィーノが緑星と梅花の方へ向き直った。

「当たり前ネ！私は紅梅花、梅の花の精だヨ！」

「私は鏡緑星、百合の花の精霊でございます」

「そしてお二人は、精霊たちの薬箱のような存在なのです」

「薬箱？」

栞奈の言葉に兄弟が首をかしげていると、梅花と緑星が説明を始めた。

「私、これ作るのが仕事。梅の花から抽出したこの甘酸っぱい液、

元気の湧く薬になるネ。さっきは直接飲ませたけど、薄めても効果

抜群ヨ」

「そして私は、魔法を使って医師の仕事をしております」

「魔法使えるの!？」

フェリシアーノが魔法という言葉に反応した。

「はい。精霊は皆、その花に因んだ魔法を使うことができます。私は百合から治癒の力を授かっているのです」

緑星がそれに答える。

「私も梅の花から、癒しの力を貰ってるんだヨ」

「私もスズランの加護で、守りや癒しの力を使えます」

緑星さんほど強くないですけど、と梅花と栞奈が口を揃えて言う。

「そうなんだ〜何か色々分かったよ」

フェリシアーノは満足そうに笑うが、隣のロヴィーノはまだ何か聞きたそうな顔だ。

「あのよ……お前たちって、回復とかの魔法しか使えないのか？普通魔法っていうと、でかい攻撃技とか使うんじゃないのか？」

ロヴィーノの言葉に、栞奈と梅花、緑星が考えるような表情をする。

「まあ、使えないことはないですが」

「私達は回復や守りが専門ヨ」

「攻撃なら、ミスターや菊さん、勇洙とかの方が得意……」

「本当だぜ！外の奴なんだぜ！」

するとどこからか、元気のいい声が響いてきた。

「勇洙、来たの？」

「噂をすれば、ですか」

栞奈は驚き、緑星は苦笑する。そこにいたのは、黒い短髪で水色のチヨゴリを着た青年。所々髪が外側にはね、巻き毛がある。どうやら彼は勇洙というらしい。

さらに勇洙の後ろからも、人影がいくつか現れた。

「うわ、外の人見るの初めてのな？」

「あまり私達と変わらないな……」

一人は茶色の短髪で朱色のチャイナ服を身につけた少年、もう一人は王耀のように長い黒髪を纏めて緑色のアオザイを着た少女だった。

「この人たちも皆精霊？」

フェリシアーノが栞奈に尋ねると、真っ先に勇洙が反応した。

「勿論なんだぜ。俺は任勇洙、ムクゲの花の精霊なんだぜ！」

「俺は朱燎海、よろしく的な。あと因みにホウセンカの精つす」

「私はファン・ツエイ・リヤン、リヤンで構わない。蓮の花の精をやっている」

勇洙と、そして燎海とリヤンの自己紹介が終わった時だった。

「大丈夫ですよ、そんなに警戒しなくても」

また別の声が出て、誰かがこちらに来る。所々逆立った黒い短髪に眼鏡をかけ、白地に金の刺繍入りの軍服を着た長身の青年だった。そして彼は険しい表情をする白い狼や象を従えている。

「外の方ですか。私はリクシーム・ワドバンゲイン、皆さんからはリクと呼ばれています。彼等は私の友達です」

「と、友達!？」

穏やかな笑みを浮かべるリクだが、フェリシアーノとロヴィーノは彼の傍の動物達に少し怯えていた。

「リクは霊獣の世話をする仕事を与えられているのですよ。だからすっかり、霊獣達と意志疎通が出来るようになったのです」

緑星が説明すると、リクはまだ警戒しているらしい霊獣達をそつと

撫でた。

「だから平気ですって。この方達は、悪いことしたりしません。怖がらないで」

すると霊獣達の表情が少しずつ緩んでいく。

「それより、勇洙達は仕事に戻らなくていいのですか？耀さん怒ってましたよ」

リクの口から出た言葉に、勇洙と燎海、そしてリヤンの表情が変わる。

「やばいんだぜ……兄貴が怒ると面倒なんだぜ」

「早く戻るう的な？」

「そうするか」

そして三人は、その場を離れて仕事に戻って行った。

「何か、騒がしくなりましたね。すみません」

栞奈は苦笑しながら兄弟に言った。気づけばこの場にいるのは、兄弟と彼女だけになっていた。

「全然大丈夫だよ。賑やかな友達がたくさんいるんだね」

フェリシアーノは笑って答える。

「確かに、一緒にいて退屈はししないでですね。そうそう、今度は私から質問していいですか？さっきまで私が話してばかりだったので」

「いいよー、と兄弟が了承すると、栞奈はある質問をした。

「どうして、この国に流れ着いたのですか？」

花咲き誇る国（後書き）

またまたオリ人名の解説。

リヤオハイ
燎海〓香港

リヤン〓ベトナム

リク〓タイ

因みにタイさんの人名は、名は「微笑み」、姓は「手綱を引く」という意味のタイ語をあてたつもり。でも発音記号がうまく読めなかったので、合ってる自信は限りなくゼロに近いです。

あと余談ですが、服の描写がムズかったです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2381y/>

夢色冒険譚～ココロのファンタジー～

2011年11月20日18時58分発行